

ごしごしと精いっぱい力を入れて背中を擦っても一樹は痛さを感じず、むしろ気持ちよさそうに座っている。

やがて裸を見る恥ずかしさに少しずつ慣れてきたくれはは、背中に湯をかけて泡を洗い流した。

「じゃあ次は、前のほうも洗いますわ」

「えっ!? そ……それはいいよっ」

「後ろを洗って前を洗わないなんておかしいですわ。ちゃんとやらないと弥生に怒られるのは私なんですよ?」

それに一樹の体を洗うことは、なんだかペットの面倒を見ているような気持ちになつてきた。いつも愛猫（虎）を洗ってあげる時と同じように楽しくなってきたくれは一樹の目の前に身体を移動させた。

「それじゃあ洗いま——きゃあああああっ!!」

しかしすぐにくれはは思わず顔を手で覆って悲鳴をあげてしまう。

視界には、腰に巻かれたタオルを押しあげる、たしかなふくらみが飛びこんできた。一樹の股間を隠すタオルは、天を向いてはつきりとしたテントを張っている。

「ななななっ……それはなんですよっ!?」



片手で自分の視線を必死にさえぎりながら、もう片手では明らかに怒張している突起を示して、お嬢様メイドは金切り声をあげた。

「これは……そのっ……」

ガバツとあわてて一樹が股間を押さえる。

「しょっ……しょっ……しょうがないだろっ!! 僕だって男なんだから」

女の子に体を見られるのも恥ずかしいのに、触られていたら勃たつものは勃たつ。

両手で覆った指の間から、ちろちろとくればの大きな瞳から恐怖心の入り混じった視線が一樹の男根へと注つがれた。

真っ白なタオルが水に濡れて、一樹の肌までをうつすらと透き通らせている。黒い陰毛の翳かげりとともに、肌の色よりも濃い色合いの男性器がまるで自分に狙いをつけた武器のように勃起している。

お嬢様として、はしたないことがどういふことなのかを教えられていたくればにも、男性の生理現象がどういふものなのかはわかっていた。

これは、一樹の下半身がいきり立ってしまったのは、一樹が興奮しているからなのだ。

(私のせいで、こんなに大きくなっちゃったんですの?)

メイド服の下、スカートの奥にある下着の向こうでより敏感な部分がキュウツと締めつけられる。

「どうにかしないと」という焦りと「見てみたい」という興味が湧いてくる。

それらの感情を押し殺すことができずに、くれはは口を開いた。

「しょうがないですわ。私はメイドですから、メイドってこういうったご奉仕もするのよね?」

「そ……そうなの!？」

思わず声を裏返しながら聞いてしまう一樹に対し、くれははコクンとうなずいた。

「……私はこんなことしたくないけど……でもしないと、弥生に怒られますわ、だから——」

弥生が——と、言いわけをすれば一樹も逃れることはできないはずだと、くれはにはわかっていた。

「だから、それを見せて。私が今から治めてあげますわ」

脅迫じみた言い方をしてしまったとも思いながらも、くれはの目は一樹の下半身に釘づけだった。

(初めてですわ、男のこのここを見てしまうの……。ちょっと怖いけど、相手は一樹

だもの。それに、恥ずかしがる一樹も少し可愛いし……)

一樹はというと、突然のくれはの言葉に戸惑いを隠せないようだ。下半身を両手で押さえ隠しながら困ったように「うん」と悩んでいたが、やがて諦めたのか、そつとそのタオルの上から手をどけた。

「うん……わかったよ」

とにかくどうにかしたいという欲望は一樹にもあった。ここまで見られてしまったあげく、くれはがなんとかしてくれるのなら、なんとかしてもらいたい。

「それじゃあお願い……」

少し躊躇ちゆうちゆうしながら一樹が覆っていたタオルを取ると、雄々しい全貌が明らかになった。

浴室のライトによって、一樹のはちきれんばかりに怒張した先端がテカテカと濡れ光っている。黒い陰毛のなかでそこはまるで意思を持った生き物のように震えていた。くれはは思わず、その勇ましい男性器に息を呑んでしまう。

「すごい……男の人のってこんなに赤くて……黒いの？」

「うん、そりゃあまあ……」

男の体のなかでここまで痛いような赤と凶悪的に翳かげった色を見たのは初めてだった。

くれはは顔を赤らめながらも、すでにその一点に集中してしまっていた。太く浮かぶ青い血管に、竿の上に、ぱんぱんに腫れあがったカリ部分。

「すごい……ここまで硬くなるのね」

くれはの手が一樹の怒張の側面に確かめるように伸びたかと思うと、細くきめ細かい指が一樹の竿を両手で包みこんだ。

しかし加減がわからず、ぎゅつと握りしめてしまふ。

「うううつ!! く、くれはつ。ちよつと痛い……」

「あ、ごめんなさいつご主人様」

一樹のうめき声を耳にし、くれははあわててパツと手を離す。今までは硬かった「ご主人様」という呼び名もすんなりと言えてしまった。

「えつと……どうすればいいのかしら……」

目の前で震える赤黒い肉棒を目の前にしながら、再び恐るおそると指先を近づけていく。どれくらいの加減で触ればいいのか？ まさに腫れ物に触れるような扱いだっただ。

「もう少し……ていねいに触ってよ。力は少しだけでいいから」

「わ、わかりましたわ……」